

ヘーゲル 1804/05

『論理学・形而上学』研究Ⅱ

山内 廣 隆

序

ヘーゲルのイエナ期は『差異論文』に始まり、『精神現象学』に終る。その道程は「絶対者を意識に対して構成すること」＝「反省の克服」＝「分離を絶対者の内に定立すること」と定式化される、『差異論文』で提起されていた哲学の課題を解決していく過程であると言ってよい。あるいは、有限者と無限者を固定的に対置する反省形式の非劇性を人間の「運命」と考えることによって、消極的にはあれ矛盾を受容する姿勢を打ち出したフランクフルト期のヘーゲルが、イエナにおいてはむしろ積極的に矛盾を自己の思索の内奥に取り入れていく過程であると言えるだろう。1804/05『論理学・形而上学』は、その思索が発酵の時期を過ぎ凝結しつつある頃の講義草稿である。ヘーゲルは、そのような自己の哲学の根本思想を「無限性」(Unendlichkeit) という概念で明確にする。この概念を先の拙論^①では、イエナ期の発展史というコンテキストの中で論じた。それに対して本稿では、よりテキストに沈潜し、無限性を「単純な関係」(einfache Beziehung) から「相関関係」(das Verhältniß)への移行の中で捉えてみたいと思う。

（一）単純な関係

1. 量

質と量は、その本性によって「限界」(Grenze)に至る。それを量の展開の中で見てみよう。質が単純な自己同一から始まるのに対し、量は否定的自己同一としての数的一から出発する。量は質の限界、すなわち数多を閉め出す反省を己れの内に含んだ数的一として登場する。しかし一者に数多な一者が対立する。ここに量は自己同一というその概念からして、数多な一者、つまり「全体性」(Allheit)であらねばならぬ。しかし全体性としての量は「規定された数多性の無」である。量はかかるものとして「共同性」(Gemeinschaftlichkeit)、
「延長」(Ausdehnung)である。延長としての量においては数多性は廃棄されているので、ここでは数多性は「可能性」として指示されているにすぎない。

2. 定 量

以上のことから、全体性としての量において「量を定量(Quantum)として規定し、差異性を自分に即して定立しようとする大きさ(Größe)の区別の欲求」(J.L. S. 12)、すなわち量の規定の欲求が生じてくる。量を定量として規定することは、純粹統一のもとにとどまろうとしている全体性としての量、すなわち無差別的量が「可能性」としてもっている区別を現実化し、そこに差異性を持ち込むことであると考えればよい。従ってかかる定量が全体性としての無限な量の限界となる。それと同時に、全体と部分(個)の対立というアポリアも生じる^②。ともあれ大きさの比較という観点の発生によって、一と多の単純な関係から存在の関係の次元へと問題は発展していると言えよう。

さて、大きさの区別は「度量」(Grad)において現実化され、「数」で表現される。度量は40度とか100度とかの度で表現される。これらの度量はそれ自体としては単純である。しかし度量が意味をもつのは「端的に他者への関係において」(J.L. S.13)であろう。しかしまた度量が度量であるためには、度量は同時に「端的に自分だけで存在するもの」(Ebenda)でなければならない。定量はこの両面をもっている。すなわち定量は他者を否定的に「排除する」(ausschließen)ことによって自分自身だけで存在するものであると同時に、他者に肯定的に関係することによって関係の結節点となる。(Vgl, J.L. S.14) 定量はこのような矛盾として量の限界と言われる。ラッソンは量の章の三節である「全体性」の最後に「定量の弁証法」を配し、アカデミー版全集もそれに倣っている。しかしそこで叙述されているのは、量の限界であるはずの定量が、実はいかなる限界づけでもないということである。その点について見てみよう。

3. 定量の弁証法

まず定量が排除するものとしてのみ存在するとき、全体と部分が「離れ落ちる」(auseinanderfallen)。差異性の発生である。しかし定量は量の内に単に差異性を導入するにとどまるのではなく、前述した定量の二側面の対立となる。定量は他者との差異性を、他者を否定し排除することによって有する。しかし定量が定量であるのは他者との関係においてのことである。つまり定量は「他者が不在の限りにおいてあり」、次に「他者がある限りにおいてある」のである。これが定量における対立である。

さらにかかる定量の対立が矛盾として捉えられる^③。量は他者を排除することによって、自ら「限定的集合」となるが、それは他者を自己と同じ数的一者、つまり「限定的集合」として定立することなのである。他者排除はかかる他者

定立を伴う。しかも、すべての存在が同一の数的一者であるから、定量の他者への関係は他者との同一、つまり「非限定的集合」を浮び上らせる。これが定量の弁証法の帰結である。定量においては、他者を排除することによって量を定量として限界づけることが、逆に量を限界づけけないことなのである。定量は「限定的集合」であると同時に「非限定的集合」である。ここに定量は「限定的集合」と「非限定的集合」の矛盾となって現われる。これをヘーゲルのタームに翻訳するならば、非同一定一となろう。ヘーゲルはかかる矛盾を「絶対的矛盾」＝「無限性」(Unendlichkeit) と呼ぶ。以上が定量の弁証法である。

(二) 無限性

上述のように定量の弁証法が示していたのは、存在の諸契機が「自己の本質において自己に矛盾すること」(J.L. S.29) であった。ヘーゲルはこの矛盾を絶対的矛盾、あるいは無限性と呼んだ。無限性の章になると、この観点が深く掘り下げられる。まず「悪無限」(die schlechte Unendlichkeit) が論じられる。

1. 悪無限

「自己矛盾」とは自己定立のための他者排除が他者定立であるような関係である。この関係が裏面で語っているものは、存在の諸契機が自己と「反対のものへの必然的関係」をもつということであろう。質や量はかかる関係を全く表現しえなかった。また定量ですら、閉め出された他者が「定量自身の内にあるという反省が欠けて」(J.L. S.35) いたのである。従って質、量、定量は、ひたすら矛盾を回避することによってその存在を維持しようとしていたと言えよう。矛盾を閉め出す論理をヘーゲルは悟性論理と呼ぶが、この論理こそヘーゲルが

「単純な関係の概念」と名づけるものである。この「単純な関係の概念」の究極的な姿として、ヘーゲルは「悪無限」を描いている。つまり、そこでは対立項の「相互外在」（*auseinanderliegen*）的關係が前提されている。かかる前提の元では、統一を目ざす要求は「無限進行」という悪無限に陥らざるを得ない。統一を絶対者、対立を有限者とするなら、そこでは絶対者（同一）は有限者（非同一）の「観念性（*Idealität*）の根拠」にすぎない。それは謂わば、純粹統一であるアイデアが、有限者を存立させながらも、有限者にとっては絶対に到達しえぬ理念であり続けるということになる。

2. 真無限

このように矛盾を排除する悟性論理に対し、矛盾を摂取し、矛盾を存在の真理となすところに成立するのが「真無限」（*die wahre Unendlichkeit*）である。

『論理学・形而上学』の展開としては、この移行が「単純な関係」から「相関関係」への移行を媒介している。一方、イエナ期の思想発展という観点から見れば、この移行は「分離を絶対者の内に定立する」というイエナ期の課題の解決に結びつく。ともあれ、ヘーゲルのこの観点こそ、有限者と無限者の真の統一へと問題を集約化してきたドイツ観念論にとって、重要なエポックを形成することになる。以下で真無限について論じていこう。

① 規定性の自己止揚としての真無限

「真無限は規定性が自己を止揚するという要求の実現されたものである」（J.L. S. 33）。「規定性」とは、ここでは他者との対立において存在する有限者と考えればよい。とすると真無限とは、有限者の自己止揚を成立させる境位ということになる。だが、止揚はあくまでも有限者の自己止揚であるから、真無限は有限者の存在のあり方と深く関わってくる。では真無限とよばれる有限者

の存在構造とは、どのようなものであろうか。

「真無限は自己の完成を常に他者の内にもっているが、この他者を自己の外にもっている系列ではなく、他者が規定されたもの自身に密着して（an）存在するところの系列である。規定されたものはそれ自身で絶対的矛盾であり、そしてこのことが規定性の真の本質である。……規定されたものは自己自身とは別のもの……直接的な反対であり、規定されたものはこのように他者であることによって自分自身なのである」（Ebenda）。真無限においては有限者は他者に対立しながらも、その他者を己れの存立にとって必然的な存在としてもつところの、自己自身において矛盾するものである。有限者はかかるものとして自己自身の「直接的反対」とよばれる。この点をもう少し詳しく見るためには、定量の弁証法を真無限の見地から論じた次の文章を重ね合わせてみればいい。「この（定量によって閉め出された他者が定量自身であるという）反省によって定量は無限者となる。……（このとき）単純な関係は実現されている。（対立する）各項の内にあるものは、やはり他の項の内にもある。すなわち各項自身との合一が定立され、各項が同一の内容をもつが故に、定量は無限者である。……一と多自身において各自の他者との合一が定立されているということが、絶対者の真なる認識である」（J.L. S. 35）。対立項である有限者、すなわち一と多は、それぞれが他者を含みもっている。一とは一と多の一であり、多とは一と多の多と言えよいのであろうか。各項は一なる多であり、多なる一である。このように各項が同一の内容をもつとき、各項は自己でありつつ他者である。つまり対立の最中で既に他者との合一が定立されていると言えよう。従って一と多の非同一は同時に同一であり、一と多の同一は同時に非同一である。この関係が有限者の真の存在構造なのであり、真無限に他ならない。

有限者はこのような関係のもとにあるが故に、自らを止揚する。すなわち有限者は自己の本質を他者の内にもちながらも、その他者に対立している。有限

者は自己でありつつ自己でない。この点に有限者の不安の源がある。有限者はこの不安によって他者へと駆り立てられる。それがとりも直さず、他者との対立の止揚に他ならない。この点をヘーゲルは「対立の本質は自分自身を止揚せんとする絶対的不安定」（J.L. S.34）と語っている。

② 絶対者の存在構造としての真無限

我々はこれまで真無限を有限者の側から、その存在構造と、それに由来する自己止揚に着目して論究してきた。それに対して以下では真無限を絶対者の側から、その存在構造に着目して論究していこう。しかしこの二元的論述の筋立ては全くヘーゲル的ではない。なぜならかかる論述の仕方は、絶対者と有限者の二元論的表象を前提としているからである。しかしそうは言っても、ヘーゲルにおいては絶対者の絶対性は、どこに見出されるのであろうか。

ヘーゲルは絶対者を一方で無限性、あるいは「無限者」（das Unendliche）とよび、他方で「単純者」（das Einfache）とよぶ。しかしヘーゲルがこれらのタームを使用して絶対者を印すのは、この『論理学』が初めてではない。1804/05の『精神哲学』で絶対者を「精神」として捉えるヘーゲルは、絶対者を「単純者」と「無限性」で言表している。そこでは単純者は同一を、無限性は「生成」の側面を表現するものとして非同一定を担うタームとして使用され、絶対者としての精神はそれら矛盾するものの絶対的同一であると考えられていた。ほぼ一年後の1804/05『論理学・形而上学』でも基本的には、これと同じ枠組みで考えられている。「単純者、と無限性すなわち絶対的対立は、それらが絶対的に関係づけられており、その限りにおいてそれらは対立していると同様に絶対的に一であるという対立以外のいかなる対立も形成しない」（Ebenda）。ここで述べられている単純者と無限性の対立は、言うなれば同一と非同一定の非同一定であらうが、それが同時に同一と表裏している関係にあるということが、ここのポイントであらう。すなわち矛盾しあうものが矛盾しあいながら同一であるというこ

とが「絶対的に関係づけられている」ということなのである。かくして絶対者は、同一と非同一の非同一が同時に同一と非同一の同一である矛盾的自己同一の関係ということになる。絶対者にかかる関係として捉えることが「絶対者の真なる認識」（J.L.S.35）であると言えよう。

上述の関係が絶対者の存在構造であるなら、それは①で見た有限者の存在構造と重なりあう。これら両者は一つであり、この点に真無限の成立根拠があると言ってよいのではなからうか。次の引用文は、ヘーゲルがこうした観点に立脚しつつ語っているように思われる。「絶対者の自己自身からのいかなる現われ（Hervorgehen）も語られ得ない。なぜなら対立は存在するが、対立は自己の存在の許にとどまりうるのではなく、対立の本質は自己自身を止揚せんとする不安定（Unruhe）であるということだけが現われとして姿を見せうるにすぎないから」（J.L.S.34）。この文章は、どのように解釈すればいいのだろうか。まず存在するのは有限者の対立的関係であり、次にかかる関係の中で存在する有限者の自己同一保持のための不安である。ここでは絶対者の絶対性は、この不安の中に現われていると言える。しかしこの不安の源についてヘーゲルは判断中止を迫っている。あたかもヘーゲルが現象主義者になったかのような趣きがある④。とすると一般的なヘーゲルの絶対者像、すなわち絶対者が自己を外化することによって対立を産出し、外化された自己を再び取り戻すという絶対者の自己媒介的運動については語られえない。

しかし上の引用文をコンテキストの中で捉えると、次のことは言える。すなわち、ヘーゲルがこの箇所得意図しているのは、自己の立場を真無限として追し出すことであり、それはまた悪無限から明確に区別することであった。そしてそれは、何がしかの実体的なものを現象の根底に置こうとする絶対者観をできうる限り排斥することであった。次の文がそれを物語っている。「対立の根拠について問われるとき、この問いはまさしくあの根拠と……対立の分離を前

提とする。……それは両者の各々がやはりまだ自独的に（für sich）存在するというように不完全な関係である」（Ebenda）。この問いは言わずもがなであるが、有限者の根底に絶対者が存在するという前提のもとに発せられている。従ってこの問いは有限者と絶対者の分離を前提すると同時に、絶対者の非絶対性を表現している。ともかくも実体的な絶対者の残滓が残っている限り、絶対者そのものの内に分離を定立することにならない。統一—本質、分離、対立—非本質という構図が残存するからである。かかる構図を固定化する反省的思惟を批判的に内に取り込みながら、なお絶対者の絶対性、すなわち統一を維持しようとする極限の努力が、単純者と無限性の「絶対的矛盾」つまり真無限としての絶対者像となって結実したのである。そしてかかる絶対的矛盾が実体性の否定に裏打ちされるとき、先の引用文で見たような現象主義者としてのヘーゲル像も浮び上ってくるのではなかろうか。

（三） 相関関係

1. 相関関係

真無限の成立は、ヘーゲル哲学形成において極めて重要な意味をもつ。それは体系内での論理学の位置に変更を加える。我々はまずその大要を押えることから始め、次に真無限の最初の現われである相関関係の概要について述べていこう。

1804/05『論理学』以前の論理学は、形而上学への予備学としての非本来的学と考えられていた。論理学は「反省を完全に取り除く^⑥」圏域として、形而上学を準備する役割を担っていた。従ってそこでは、分離、対立を生み出す反省が、絶対者の認識である無限な認識から閉め出され、無限な認識の外に置かれてい

ることになる。悟性的思惟である反省は、理性的思惟である思弁から排除されている。それに対して、1804/05『論理学』の面目は、デュージングが「形而上学を既に自己の内に含む思弁的論理学への移行^⑥」と指摘する点にある。すなわちヘーゲルは、論理学と形而上学を「認識」の発展として一本の糸で結び、前者を認識の生成である「第一の生成」、後者を生成した認識の自覚である「第二の生成」と名づける^⑦この観点が可能になるのは、反省が思弁と、悟性が理性と同等の権利を獲得するときであろう。すなわち「分離が絶対者の内に定立されること」によってでしかない。この視点へのヘーゲルの思索の深まりを印しているのが、絶対的矛盾としての真無限なのである。

さて、1804/05『論理学』の展開は、単純な関係の限界である定量の弁証法を通じて無限性へ至り、その中で悪無限から真無限へと生成している。悪無限が単純な関係の「観念性 (Idealität) の根拠」と言われていたのに対し、真無限は単純な関係の「実在性 (Realität) と言われる。イデアと個物、同一と非同一の関係についての認識の深まりが両者を分ける。しかしいずれにしても、無限性における関係は、単純な関係ではありえない。無限性においては、定量の弁証法が示していたあの対立、すなわち「他者がある限りにおいてある」関係と「他者がない限りにおいてある」関係の関係が問題なのである。ヘーゲルは言う。「無限性において関係づけられるところのものは、一と多の単純な関係ではなくて、一と多の関係と一と多の非関係」(J.L. S. 37) であると。つまり無限性においては、関係と非関係の関係が問題となっている。かかる関係をヘーゲルは「単純な関係」から明確に区別して「相関関係」とよぶ。勿論、単純な関係は相関関係から単に排除されるものではなく、むしろ相関関係の両項として無限性の内に存立を得ている。例えば単純な関係の対立項である一と多の「非在」と「存在」という対立関係として。相関関係は「論理学」の展開の中では、単純な関係の結果としての無限性の最初の現われである。しかし無限性である

相関関係は、このように単純な関係を包み込み、支えている関係であるから、存在の順序としては、単純な関係より先なるものであり、従って論理学そのものが無限性のエレメントのもとに展開されていると言える。これもデュージングが「思弁的論理学」への移行と指摘するゆえんである。

ところで「無限性」とは元来、非同一を担うタームとして真無限の対立的側面を示していたが、かかる対立的関係が相関関係の第一の側面である。次に真無限は「単純者」として対立の止揚という側面を有していたが、かかる合一的關係が相関関係の第二の側面である。この二側面を含めて相関関係の内実が、次の文章の中によく示されている。「無限性は相関関係であり、そして無限性である全体 (Ganze) は自己自身が他者となるとともに、自己内へと反照 (reflektieren) しなければならない。無限性は自己内で分割され、区別されているにも拘わらず、この区別を止揚しつつ無限に自己自身にならなければならない単純者である」(Ebenda)。これを要約することによって、1. 相関関係の結論にしたい。①相関関係は無限性である。②無限性である相関関係は関係と非関係の関係として、関係諸項を包み込む「全体」である。しかしこの全体は、のっぺら棒の全体ではない。③無限性である相関関係が全体であるのは、自ら自らを区別しつつ、その区別された自己から区別する自己へと立ち戻り、区別を止揚する自己関係としてである。④そして無限性である相関関係のかかる対立と止揚の運動は「自己自身にならねばならない (werden müssen)」謂わば単純者としての無限性の運命の中に、その原因を有するのである。

しかし無限性は論理学の展開の中では、やっと単純な関係から生成してきたばかりであって、その概念だけが定立されているにすぎない。従ってこれからの論理学の展開は概念に「実在性」を与える過程となる。それは「全体」である無限者の「支脈」(Arm) を無限なもの、自己自身として定立することに他ならない。

2. 実体性の相関関係

相関関係は A.「存在」(Sein) と B.「思惟」(Denken) の二部に分かれ、前者は AA.「実体性の相関関係」(Das Substantialitäts Verhältnis)、BB.「因果性の相関関係」(Kausalitätsverhältnis)、CC.「交互作用」(Wechselwirkung) の三節に分かれる。A. 存在の相関関係の中心は、BB. 因果性の相関関係であろうが、紙数の制限上、本稿では AA. 実体性の相関関係のスケッチをするにとどめておかなければならない。AA. 実体性の相関関係は、「可能性」(Möglichkeit)、
「現実性」(Wirklichkeit)、
「必然性」(Notwendigkeit) の三つのカテゴリーによって展開される。BB. 因果性の相関関係の最も注目すべき箇所は「力と外化」の論点であろうが、これらはそれに連なるカテゴリーという観点からも、きっちり押えておかなければならない。

① 可能性

実体はまず「さまざまな質」の共存する「共同性」「空間」として存在する。つまり実体はヘーゲルが規定性とよぶさまざまな質として存在する。しかし規定性は、そもそも他の規定性との関係において存在しうるものである。すなわち規定性は「他の規定性が存在しない限りにおいてのみ存在し、しかも他の規定性が存在しない限り存在しない」(J.L.S.40) のであるから、規定性それ自身は可能的なものである。従って規定性としての実体は「可能性」でしかない。ともあれ「即自的にそれ自身で」(an sich selbst) 存在しえぬ規定性が存立しうるのは、他の規定性との関係において「止揚された規定性」である場合であろう。止揚された規定性は、もはや単純な関係の質ではない。それは無限性の表現に他ならない。実体は自己をかかえるものとして定立しなければならないのである。それが可能性の弁証法である。

② 可能性の弁証法～現実性

可能性としての実体は、「内容」としては一つの規定性であるが、「形式」としてはその規定性を成立させている共同性である。ここに実体は、それ自身において分裂している。「この実体は規定性の無であり、かつ規定性の存立 (Bestehen) である」(Ebenda)。規定性が存立するもの、存在であり、それに対して共同性が無である。しかし無も「規定され止揚された存在」であろう。なぜなら無といえども「規定性に対立しながらも、規定性に関係づけられている」(Ebenda) から。それに対して、存在、つまり他の規定性を排除して現出している規定性は排除するだけなら、単に量的な数的一であろう。しかしこの現出している規定性も、無つまり他の排除された規定性によって「規定された存在」である。従って存在と無は相互に規定し合う関係にあり、よって排除する規定性は排除される規定性と同様に可能的なものと言える。こうして現出している規定性は「その規定性の代りに他の規定性が同様にありうる規定性」(J.L. S. 41) ということになるが、かかる可能的規定性が「現実性」である。

③ 現実性の弁証法～必然性

以上から、実体の属性、つまり定立された規定性は、あることもないこともありえる「偶有性」(Accidenz) である。しかし偶有性の「本質」(Wesen) は他の偶有性に関係づけられて存在する点にあり、更にそれぞれの偶有性が他者との関係において「止揚された存在」であった。従って実体はこの偶有性だけでなく、他の偶有性でもありえる両者の「そして」(Und) であり、よって偶有性は現実的なものであり、かつ可能的なものであるということになる。こうして「真なる実体は、現実的なものは可能的なものであり、可能的なものは現実的なものであるというかかる矛盾 (Widerspruch) である」(J.L. S. 42)。つまり実体は、それ自身において現実的なものであるとき可能的なものであり、可能

的なものであるとき現実的なものである「自己に反定立されたものへの直接的転倒（Umschlagen）」（Ebenda）である。ヘーゲルは「定量の弁証法」における「反対のものへの必然的關係」を無限性と述べていたが、いまやかかる關係が実体性において表現されている。実体のこの側面が「必然性」である。たしかに一つの規定性として現出している実体は偶然的なものであり、真に存在するものではない。しかしその裏側で働いている相関關係、すなわち「（反対のものへの）直接的転倒」こそ必然的關係であり、真に存在するものなのである。

④ 規定性の自己止揚

現実性としての実体は、「定立された可能的なもの」であった。ヘーゲルはこの運動を謂わば実体の側から捉え、次のように語る。「実体は現実性において、可能性として存在するところのものを二分する」（J.L. S. 41）。実体は可能的なものを「定立されたもの」と「定立されないもの」へと分割し、自らの内に不同性をもちこむことによって現実性となる。しかしかかる実体の自己分割は、以下の文脈で理解されねばならない。

無限性は「規定性の自己止揚」であった。我々は最後にこの点に着目しておこう。ヘーゲルは次のように語っている。「実体にとって実体が止揚するものとして存在するためには、実体の栄養分（Nahrung）、つまり諸契機が存在が欠けているときには、実体自身は真には存在しない。諸契機こそ真に存在するものであり、現実的なものは自分自身において自己の本質に従って可能的なものである……無限者は実体すなわち必然性として真に自己自身の反対であり、純なものではない關係そのものである」（J.L. S. 42 f.）。まず、実体は諸契機、すなわち規定性なしには存在しない。むしろ存在するのは規定性である^⑧。次にこの規定性は自己矛盾、自己自身の反対を自己の本質とするが故に自らを止揚する。すなわち規定性は自ら規定し規定される規定性として可能性でありつ

つ現実性であり、しかも同時に両者の統一、必然性なのである。従って実体の自己分割も、かかる規定性の自己止揚という文脈で、規定性自身による規定する規定性と規定される規定性への分割と捉えられねばならないであろう。そしてかかる観点に立ち、引用文中の「単純なもの」を「実体」(Substanz)と、次に「関係そのもの」を「規定性の自己止揚」=「主体」(Subjekt)と読み込んでいくなら、『精神現象学』のあの有名な命題も、さほど遠きにあるものではないであろう。無限性という概念は、このような実体と主体、絶対者と有限者のぎりぎりの接点に成立するところの矛盾的自己同一というすぐれて弁証的概念であると言えよう。

[引用省略記号]

J.L. = G. W. F. Hegel, Jenaer Systementwürfe II, in: Gesammelte Werke 7, hrsg. im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1968 ff.

J.M. = Ebenda

上二者を^{1804/05}『論理学・形而上学』と略す。

注

- ① 拙稿『^{1804/05}「論理学・形而上学」研究Ⅰ』廣島哲学会『哲学』第37集（1985）所収
- ② Vgl, Heinz Kimmerle, Das Problem der Abgeschlossenheit des Denkens, in: Hegel-Studien Beiheft 8, 1970, S. 57
キムメレは全体と部分の対立の克服は、無限性概念の導入によって把握されうると述べている。
- ③ 後年の『論理学』で展開される区別のトリアーデ、差異性・対立・矛盾が必ずしも明確ではないが、裏面で働いている。
- ④ 加藤尚武氏は「本質は現象する」というヘーゲルのテーゼは、現象主義を示すものではないかと立論されている。一般にはこのテーゼは、本質-真実在、現象-影というプラトン以来の本質主義を代表するものと考えられている。従って加藤氏の立論は、そのようなヘーゲル解釈に対するアンチ・テーゼである。本文中の問題もこのような方向へ発展していく可能性を孕んでいる。注⑧の問題もこの観点に連なるものである。『理想』641号参照

- ⑤ Vgl, Karl Rosenkranz, G.W.F. Hegels Leben, 1844, 1977, S.191
- ⑥ Vgl, Klaus Düsing, Das Problem der Subjektivität in Hegels Logik, in: Hegel-Studien Beiheft 15, 1976, S.150
- ⑦ Vgl, J.M. S. 141
- ⑧ 注④参照

（比治山女子高校）

In früher Abhandlung untersuchten wir den Begriff der "Unendlichkeit" in der Entwicklungsgeschichte in Jena. In dieser Abhandlung untersuchen wir dessen Begriff, nach dem Text, in dem Übergehen von der "einfachen Beziehung" zum "Verhältnis".

Inhalt: Einleitung

I Einfache Beziehung

1. Quantität
2. Quantum
3. Dialektik des Quantums

II Unendlichkeit

1. die schlechte Unendlichkeit
2. die wahre Unendlichkeit
 - ① die wahre Unendlichkeit als Selbstaufhebung der Bestimmtheit
 - ② die wahre Unendlichkeit als Seinsstruktur des Absoluten

III Verhältnis

1. Verhältnis
2. Das Substantialitäts Verhältnis
 - ① Möglichkeit
 - ② Dialektik der Möglichkeit ~Wirklichkeit
 - ③ Dialektik der Wirklichkeit ~Notwendigkeit
 - ④ Selbstaufhebung der Bestimmtheit